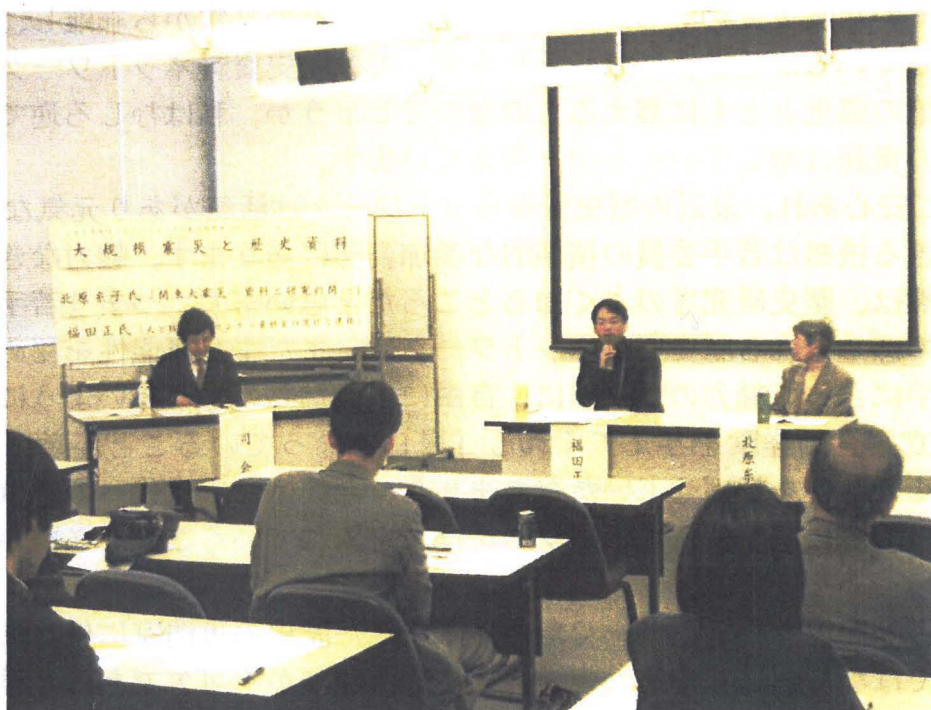


☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第53号 2008年5月13日(火)

発行：歴史資料ネットワーク



▲ (2008年3月29日撮影)

目次

巻頭言

震災記憶の風化と歴史資料ネットワークの
 責務 板垣貴志…2

◆◆特集1◆◆

第三回 地域史卒論報告会

趣旨と概要 …3

報告者の感想 …4

花尻千秋／梶岡一路／

井上 誉／中村昌民

◆◆特集2◆◆

人と防災未来センターリニューアル展示見
 学会・シンポジウム

「大規模震災と歴史資料」

概要 …8

感想アンケートまとめ …9

◆◆告知◆◆

2008年度講演会・見学会のご案内

…12

震災記憶の風化と歴史資料ネットワークの責務

阪神・淡路大震災震災から13年を経て、震災記憶の風化が危惧されています。このような現状に対して、歴史資料ネットワークの模索は続いています。現代資料と言われていた震災資料群も徐々に歴史化し、人々の日常から乖離し、忘れ去られようとしているかのように感じられます。では歴史資料ネットワークの活動は、震災記憶の風化とともに衰えるものなののでしょうか。私はむしろ逆であり、ますますその責務は増していくものと考えています。

その点、ご安心あれ。最近の歴史資料ネットワークは活気があり元気なのです。そう断言できる根拠は若手委員の積極的な参加姿勢にあります。魅力なきものが衰退する必然は、歴史研究者のよく知るところだと思います。つまり若手委員にとって魅力の感じられる歴史資料ネットワークは、まだまだ可能性を秘めているのです。若手にとって魅力のひとつに、自由に自分たちのやりたいようにシンポジウム等の立案企画経験を与えてくれる「場」となっていることが挙げられます。私自身も多くのことを学ばせていただきました。今後は、次世代への継承も考慮して、若手の教育に歴史資料ネットワークは力を入れていくことが必要かと思います。

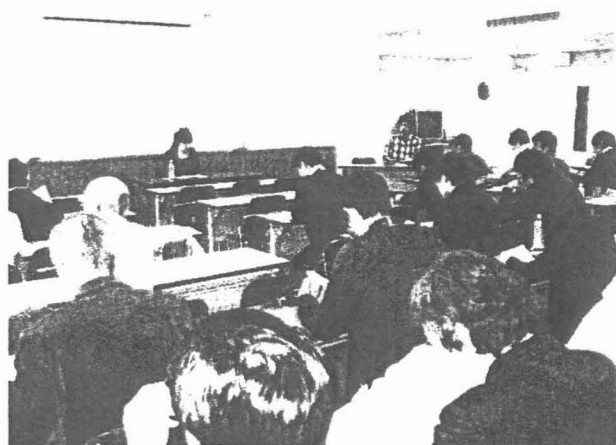
また、震災の記憶を継承していくためには、ただ歴史の専門家に任せればよいというものではなく、広く市民の方々の主体的な参加が不可欠であると考えております。それは震災の記憶に限らず、地域歴史像の形成作業や地域歴史遺産の保存・継承にも市民の方々の協力が必要です。

今回のNews Letterでは、震災当時、中学生・高校生であった若手委員が中心となって立案企画したシンポジウム「大規模震災と歴史資料」と、卒論報告会の様子をお伝えします。卒論報告会は、大学で歴史を学び社会へ旅立っていく学生達に、研究内容を発表や活字化する機会をもうけ、今後も地域歴史遺産への関心を結びつける動機付けなればとの趣旨でおこなっているものです。

今後の予定として、若手委員を中心に、中世の災害史に関するシンポジウムを企画中であります。乞うご期待。

(板垣貴志／いたがき・たかし 歴史資料ネットワーク運営委員)

地域史卒論報告会



《 趣旨と概要 》

2008年3月16日（日）、兵庫勤労市民センターにおいて、神戸史学会と共催のもと、第三回となる「地域史卒論報告会」が開催されました。

社会人となる多くの学生にとって、それまでの研究成果の総決算となるものが卒業論文です。しかしほとんどの場合、卒業論文は発表の場もなく死蔵されているのが現状で、これは執筆した学生にとっても、その成果を享受できない学界や地域社会にとっても、非常に寂しい事態といわざるをえません。卒業論文を発表する機会を設けることで、その研究成果を地域社会に還元し、歴史に対する興味と理解を深めることができれば…。また、大学で歴史学を学んだ学生が、発表の場と研究へのレスポンスを得ることで、社会人になってからも歴史学への関心を持ち続けてくれれば…。それは市民社会の中に歴史への関心や価値観を育み、間接的に歴史資料に対する意識を高めることに繋がっていくでしょう。そのような思いから、研究題材に西日本（特に阪神）地域を扱った学生を発表者として募り、この地域史卒論報告会は立ち上げられました。

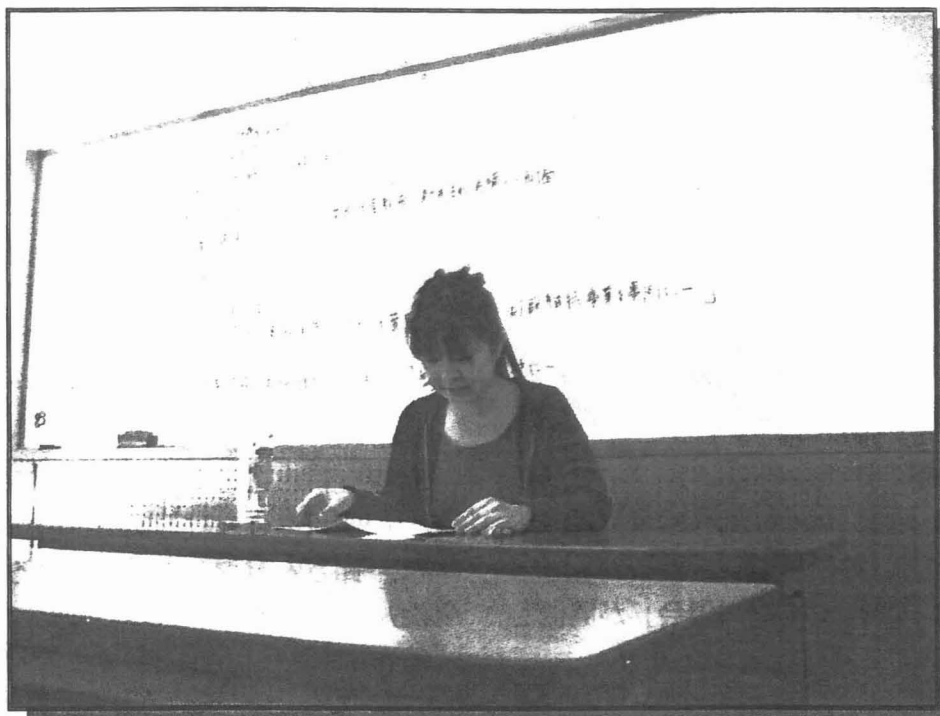
今年度は、花尻千秋さん（大阪大学）による「中世後期における熊野三山検校と山伏」、梶岡一路さん（神戸大学）による「明治中後期尼崎における旧士族の一動向 ―尼崎士族会を題材に一」、井上誉さん（大阪市立大学）による「大正期釜ヶ崎東入船町の木賃宿と貧民児童教育 ―都市支配再編の一側面―」、中村昌民さん（大阪大学）による「戦時期における農地政策とその実態 ―大阪府萱野村の自作農創設維持事業を事例に一」の四名の方から報告をいただきました。今回は地域史卒論報告会で初となる中世史を扱った報告もあり、内容に関してもそれぞれ非常に充実したものであったと思います。また、先年にも増して各大学の学生、そして一般市民の方の来場を得て、活発な討論がおこなわれていたのが印象的でした。回を重ねるごとに、この報告会の持つ意義が深まりつつあることを、はっきりと感じられたように思います。

今回のニュースレターでは、報告をいただいた四名の方から、当日の感想をいただいています。どうぞ御味読ください。

（文責：森脇崇文 もりわき・たかふみ／運営委員）

卒論報告会に参加して

花尻千秋



私の報告は、室町時代の修験道についての
ものでした。神戸周辺の地域史とはいえず、
かつ修験道という、ある意味特殊な分野の研
究です。専門的に研究している方以外には、
わかりにくい部分が多い報告になってしまっ
たのではないかと思います。

実際、報告終了後、休憩の時間中に質問し
てくださった方がいらっしゃり、やはりわか
りづらかったのだと反省しました。しかしそ

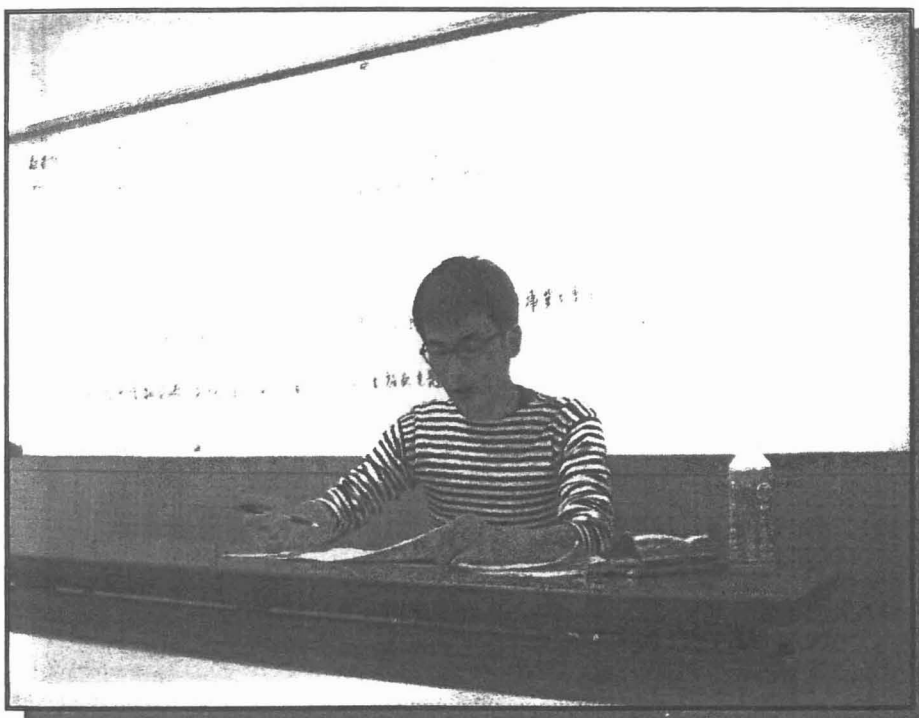
れと同時に、興味を持っていただけたことを
とてもうれしく思いました。

私のまわりにも、歴史の専門家ではないが
歴史に興味を持っている方がたくさんいます。
就職先は、歴史と関係するといえなくもない
ので、ここで得た経験を大事にして、一般の
方々にも歴史をわかりやすく、ということを、
これからも心がけていきたいと思います。

(はなじり・ちあき)

地域史卒論報告会に参加して

梶岡一路



去る3月16日、私は「地域史卒論報告会」に報告者として参加させていただきました。残り少ない学生生活の記念にと軽い気持ちで引き受けましたが、不特定多数の方を前に自分の名前で報告するという重みを痛感することとなりました。それまで学外で報告するという経験が私にはなかったからです。一般の方々に報告するということで、報告の方法・様式についても悩みました。自分なりに試行錯誤をし、その結果、研究史的意義をアピールするよりも、自分の研究の「おもしろさ」を分かりやすくアピールすることに努めました。しかし、これらが十分に実現できていたかについては疑問であり、この報告会にずっと付いて回る課題なのかなと思いました。

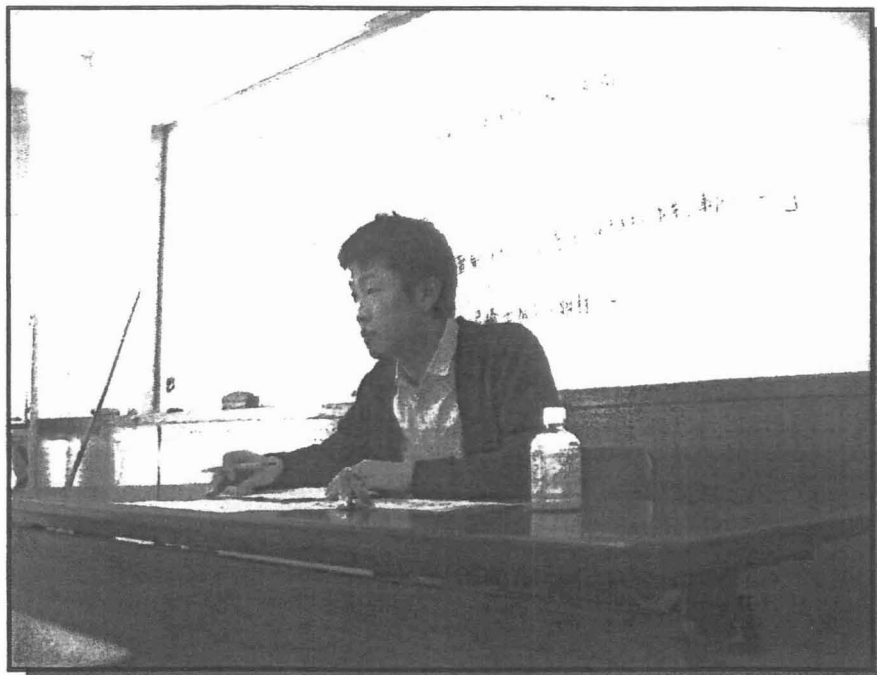
偶然ですが、報告中「この表に自分の祖父の名前が載っている」と発言された方がおりました。その方はご自身の家のルーツを探っている方のように、大変喜んでおられました。研究的には「重要な」事実ではないでしょうが、自分のしたことに対して喜んでもらえるというのは私としても単純にうれしく、参加して本当によかったなと感じられた出来事でした。

終わりにですが、この場を借りましてこのような会を催していただいた史料ネット・神戸史学会の皆さんに厚く御礼申し上げます。

(かじおか・かずみち)

卒業論文報告会に参加して

井上 誉



今回の卒論報告会の話を聞いたときには正直驚きました。しかし、私の卒論研究は不十分な点を多く残していましたが、迷わず引き受けました。なぜなら、これまで取り組んできた研究の成果を報告することは、自分にとって大変貴重で、今後二度とない経験になるだろうと直感したからです。

自分の報告を振り返ると、よりわかりやすい説明、質疑へのより適当な返答ができたのではないか、と思うところもあります。しかし、私の拙い報告にも関わらず正確にご理解いただき、なお且つ的確なご意見やご指摘をいただけたことを嬉しく思いました。

また、学生生活最後に本報告会で報告したことによって、これまでに学んできたことを再び省みることができました。今回の経験は、私が一般就職して社会人になってからも、これまで歴史学で学んだことを思い出させてくれるかけがえのない記憶となるはずです。最後になりましたが、本報告会をご準備してくださった委員の方々、ご参加された方々に感謝を申し上げます。今後も市民と大学、大学間の交流、そして地域文化を学ぶことのできる貴重な場である卒論報告会のさらなるご発展をお祈りしております。

(いのうえ・ほまれ)

卒業論文報告会を終えて

中村昌民



卒業研究の締め括りに、このような場で報告させていただいたことを大変嬉しく思っています。専門・非専門に関わらず、多くの方々から鋭い指摘や忌憚のない意見をいただき、真っさらな心持ちで自分の卒論を見つめ直すことができました。

ただ一点残念だったのは、大学生と市民をつなぐという本会の趣旨に十分応えられなかったことです。歴史学という体系化された学問を一般の方に分かりやすく伝えるにはどう配慮するか、今回の報告を通して、その難しさと大切さを痛感しました。

また同時に、体系化のなかで捨象されていくような要素をもクローズアップする地域史の強みにも気づかされました。学問の「たこ壺」化を防ぎ、重厚・多様な歴史像を描写していく。私は今後歴史学から離れますが、このような姿勢をもちながら日本史に関わり続けられればと思います。本当にありがとうございました。

(なかむら・まさと)

「大規模震災と歴史資料」

《 概要 》

去る2008年3月29日（土）、歴史資料ネットワーク（史料ネット）は見学会・シンポジウム「大規模震災と歴史資料」を開催した。主催者側としては、いわゆる市民講座ではなく、専門家向けの見学会・シンポジウムを意図して、関西の歴史系4学会（大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・京都民科歴史部会・日本史研究会）の共催と、人と防災未来センター資料室の後援を得ておこなった。

当日はまず、リニューアル展示の見学会から始まった。人と防災未来センター4Fで、阪神・淡路大震災を再現した1.17シアターを見学し、3F震災資料展示、2F防災展示をみて廻った。その後、震災資料専門員の案内の下、7Fの収蔵庫を見学した。

見学会終了後、暫しの休憩をとり、5Fセミナー室にてのシンポジウムに移った。基調講演は、災害史研究の第一人者である北原糸子氏（神奈川大学教授）による「関東大震災—資料と研究の間—」であった。講演は、北原氏が推進してきたプロジェクトである関東大震災に関するデータベース

（<http://www.himoji.jp/database/db06/>）の説明を中心に進められた。関東大震災にともない発生した火災類焼範囲の拡大経過等が非常に詳細で印象的であった。区により被災状況はま

ちまちであり、区史をベースにした歴史像の構築を北原氏は提示された。また、関東大震災に関する資料が被災市民から多数寄贈されたが、現状では活用されることもなく死蔵されているという憂うべき状況が報告された。

その後、福田正氏（人と防災未来センター震災資料専門員）から「人と防災未来センター資料室の現状と課題」が報告された。福田氏からは現代資料を扱う上での制約と可能性が語られた。

最後の質疑応答の時間は、災害史を専門としている方を中心に多様な意見が飛び交った。北原氏は阪神・淡路大震災が災害史を取り巻く状況を大きく変えたことを強調され、その意義を自身の実感として語られた。北原氏の発言は、若手に夢を持たせるような内容であったことが印象的であった。

参加者からは、リニューアル展示に対して主催者側から説明がなかったこと等、見学会としての問題点が指摘されており、反省すべき点は多いと思われる。それは今後の課題でもあるが、同時に、歴史資料ネットワーク活動の原点でもある震災資料の行く末を我々は注意深く見守っていく責務があると考えさせられた見学会・シンポジウムでもあった。

（文責：板垣貴志 いたがき・たかし／運営委員）

見学会・シンポジウムに参加して (当日のアンケートより)

〔展示見学会について〕

- ・大変良かった。
- ・期待した内容でした。
- ・お金をかけているという印象をもった。
2階体験コーナーは工夫している。4階1. 17シアターは△。気分が悪くなる人が出そう。大震災ホールドラマは、私は○。良かったと思う。
- ・私自身当時2階就寝中、気がつけば建物全壊にて1階に転落、九死に一生を得たことを思い出しました。
- ・展示内容の中心は震災の物理的被害にあったのではないか、その実態をふまえて

- 人々のくらしがどう破壊されたかということ、そこから現在に至るまでどのように展開してきたかということが弱い。以前の展示とどう違うのか、展示替えの意図などについての解説が欲しかった。
- ・はじめて見学したので震災をもう一度とらえなおしてみたいと思いました。内容的にはしんどかったです。
- ・見学会と組み合わせたシンポは成功。
- ・初めて人防を見学しました。ボランティアの方の活動が目を引きました。





〔北原糸子氏の講演について〕

- ・ 話法にもう一工夫がほしい。
- ・ 間近に迫っていると思われる関東大震災に対する備えは大丈夫か？どう事前準備するか？こうしたニーズに応える内容を少し期待していましたが…少し残念。
(学問の世界は別、といわれるでしょうが…)
- ・ 最新のデータベースの紹介を含め、興味深いお話でした。さらに研究を深めてください。救援は重要な視点だと思います。
- ・ 関東大震災の資料状況がよくわかった。
- ・ 関東大震災は私の誕生2年前の災害なるも、発生後の救援体制等をお聞きしたかったです。
- ・ 作成されたデータベースと丁寧に紹介された区史をどのように連関させて震災の

問題を考えるかということが重要なのではないか。

- ・ 大変興味深く勉強になりました。歴史学のすごさ、実感いたしました。
- ・ 人と災害の関連について全体的なお話としては大変有意義でした。
 - ・ データベースがおもしろかった。データベースと聞くと、どうも文字のデータを思い浮かべますが、写真だと字で読むよりも具体的で分かりやすいですね。重いのでスムーズに動かないのが難点だと思います。もう少し軽めに作動するように、代表的な分かりやすい写真をピックアップしたアルバム形式のページも作ってみたらどうでしょう。そっちの方がより一般的で利用しやすいと思います。



〔福田正氏の報告について〕

- ・話法にもう一工夫が欲しい。
- ・展示部門と資料整理部門が分かれているのは残念である。積極的な取り組みを期待したい。
- ・資料の活用のあり方（たとえば震災についての歴史叙述をおこなう組織の設置が重要でないか）との関係で資料の収集・保存のあり方が考えられることが必要。
- ・福田さんは「かわらない」という発言をされましたが、かえていただきたい。多くの提供者のためにもかえていただきたいものです。資料収集に関わった者を代表して、この1年福田さんの考え方等をじっくりと見させていただきたい。資料は活かすもの。死なせることのないように…。
- ・史料の保存や収集よりも、一般の人に公開—展示し、情報や教訓を発信することの方がずっと大事だと思います。私は一般人（研究する側の人じゃない）ですが、震災に関する資料のことは、皆さんが考えていらっしゃる以上に知りません。もっと知識を、社会に向けて発信を。
- ・実務的な内容が柱だったせいか、専門外の参加者にはいささか難しかった。その一方で様々な制約の中で仕事をされているのがよく分りました。

◆◇編集後記◇◆

◆今回は史料ネットの第三回地域史卒論報告会、人と防災未来センターリニューアル展示見学会・シンポジウム「大規模震災と歴史資料」を中心にお届けしています。長らくお待たせしてしまい、大変申し訳ありません。

◇汗ばむほどの陽気が続き、早くも夏の気配が近づいてきましたが、いかがお過ごしでしょうか？巻頭言にもあります通り、人と防災未来センターの見学・シンポジウムは、若手委員が中心となって企画した初の試みです。今回の経験を生かしつつ、今後も第二・第三の若手企画を打ち出してまいりますので、ぜひ皆様ご参加よろしくお願いいたします。（M）

史料ネット NEWS LETTER No.53 2008年5月13日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565（開室時間 平日の午後1時～5時）

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

2008年度講演会・見学会

草の根史料館の編んだ地域史 ～『本庄村史』編纂を終えて～

神戸深江生活文化史料館は、地域の歴史研究やその成果の普及のため、昭和56年（1981）に深江財産区によって、設立されました。旧本庄村（江戸時代以来の郷村の西青木村・青木村・深江村から成る）の史誌を編纂していくあいだに収集された生活文化史の資料を保存し展示しています。

今回の講演会では、『本庄村史』の発刊を記念して執筆者の森岡秀人さんをお招きして考古学の立場から東神戸の歴史について最新の成果を、大国正美さんには史料館設立の経緯と村史で明らかにされた地域史像を古代から近代の合併時までお話しいただきます。見学会では、史料館の展示を見学します。史料館には、多くの有志の方から寄贈された数千点の民具や史料など東神戸の地域社会の歴史や生活文化の歩みを教えてくれる貴重な祖先の遺産があります。この見学会をつうじて、「草の根史料館」としての神戸深江生活文化史料館の歩みと成果をふりかえり、地域の中の史料館のあり方を考えてみたいと思います。みなさまふるってご参加下さい。

日時 2008年6月7日（土） 午後1時30分～5時00分

場所 深江会館 （神戸市東灘区深江本町3-5-7、電話078-411-0475）阪神電鉄「深江」駅、南へすぐ

講演 森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）

「考古学と地域社会

—本庄村史歴史編（通史）の執筆を終えて—

大国正美氏（神戸深江生活文化史料館副館長）

「東神戸の古代から近代史再発見

—『本庄村史』と「うはら」復権を目指して—

見学会 神戸深江生活文化史料館

参加料 500円（資料代）

申し込み 史料ネット宛に住所・氏名・電話番号・見学会参加希望と明記の上、メール・FAX・はがきで受付。

定員は50名。

《歴史資料ネットワーク》

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内

FAX：078-803-5565

メール：s-net@lit.kobe-u.ac.jp

主催 歴史資料ネットワーク

